

[023]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4773098>

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, 2022-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

教育計画の社会学

1. 講義の概要

本講義「教育計画の社会学」は、2021 年度秋学期に、修士課程を対象に開講され、木村拓也准教授の指導のもとに行われた。学部生、研究生も合わせた 9 名が参加し、授業が進められた。今期のテキストは、『社会科学と因果分析 ウェーバーの方法論から知の現在へ』（佐藤俊樹、2019、岩波書店）を用いている。

講義の進め方としては、まず参加者全員が、事前に講義で扱うテキストの範囲を読み込み、自身の考えをレジюмеにまとめて提出する。レジюмеの記載事項は①面白い考え方だと感じた箇所、②面白いと考えた理由、③同様の理論(内容)で別の事例を考え、書き出すことの 3 点である。各章ごとに割り振った担当者は、参加者が事前提出したレジюмеの内容から、問題設定や協議ポイントをまとめた進行レジюмеを作成、そして実際の講義では司会者も兼ねて進行していく。もちろんレジюмеの記載事項①と②についても様々な議論がなされたが、最も時間をかけて話し込んだ内容は、多くの講義で③同様の理論(内容)で別の事例を考え、書き出すことについてであった。また、第 6 回と第 7 回の講義は、各受講者がテキストの内容を踏まえ自身の研究課題について検討したい点を発表した。

2. 講義日程

本授業における講義日程と内容、担当者は以下のとおりである。

第 1 回 2021 年 10 月 4 日

オリエンテーション

第 2 回 10 月 18 日 (司会者 : 6 限 徳永、7 限 高倉)

第一章 社会科学とは何か

第一回 社会科学は何をする？

第二回 人文学と自然科学の間で

コラム 1 ウェーバーの方法論の研究史

第二章 百年の螺旋

第三回 リッカートの文化科学 価値関係づけの円環

第四回 機能主義と因果の推論 制度のしくみと意味

第五回 システムと文化科学と二項コード 現代の座標系から

第 3 回 10 月 25 日 (司会者 : 6 限 園、7 限 陣内)

第三章 適合的因果の方法

第六回 歴史の一回性と因果 リッカートからフォン・クリースへ (1)

第七回 適合的因果と反実仮想 リッカートからフォン・クリースへ (2)

第八回 「法則論的／存在論的」「客観的可能性」の考察 (1)

第九回 「事実」と知識 「客観的可能性」の考察 (2)

第一〇回 量子力学と経験論 「客観的可能性」の考察 (3)

コラム 2 骰子の目の法則論 (ノモロジー) と存在論 (オントロジー)

第 4 回 11 月 1 日 (司会者 : 6 限 高倉、7 限 陣内)

第四章 歴史と比較

第一一回 日常会話の可能世界 因果分析の方法論 (1)

第一二回 歴史学者の思考実験因果分析の方法論 (2)

第一三回 自然の科学と社会の科学 経験的探究としての社会科学 (1)

第一四回 比較社会学への展開 経験的探究としての社会科学 (2)

コラム 3 一九世紀の統計学と社会学

第 5 回 11 月 8 日 (司会者 : 6 限 徳永、7 限 園)

第五章 社会の観察と因果分析

第一五回 法則論的知識と因果推論

第一六回 社会科学と反事実的因果

第一七回 因果効果と比較研究

コラム 4 三月革命の適合的因果と期待値演算

第一八回 事例研究への意義

第一九回 ウェーバーの方法論の位置

第二〇回 社会科学の現在 閉じることと開くこと

第6回 講義内容を踏まえたプレゼンテーション1

発表者：園、桑、アレックス

第7回 講義内容を踏まえたプレゼンテーション2

発表者：徳永、張、程

3. 協議内容

本講義で行われた議論として、特に印象深いものを挙げると、以下の2点である。

1 点目は、量的研究と質的研究に対する認識についての議論である。司会者が提起した質的手法と量的手法について対立的に語られることがあるとの問題意識から始まり、各参加者それぞれのこれまでの質的手法、量的手法についての認識やその変化、なぜ両者が対立的に語られるのかについての議論を行った。まず見られたのは、量的手法により結果が量や数で示された方が、説得性がよりあるように感じていたという意見である。受講者の多くがそのように認識していたようであったが、テキストを読み進めていくなかで、本当に説得性があるのか疑問に感じて始めている受講者もいた。議論の中で興味深い意見としては、質的調査の側面からは観察者と当事者のズレがないように研究を行うべきであるが、両者の見解が完全に一致してしまうと観察者は当事者に取り込まれてしまうのでは、とする意見や、量的調査の側面からは、量的調査の際に当事者の話をせずに聞いてしまうと、あまりにも外的になる可能性がある。一方で、当事者から一步引くことで第三の変数など当事者が想定できなかった点を導くことも可能になるとする意見である。

確かに、量的/質的な研究の間には大きな溝があるように感じる場面はあるが、それは研究手法が異なれば当然生じるものであると考える。ただ、説得性の有無においては、量的/質的な研究は共に、自然科学的な一般性などにとらわれ過ぎている側面があるのではないかと改めて考え直す機会となった。そもそも、説得性とはなんなのか。自然科学的な一般性を示す必要が本当にあるのか。最終的に様々視点から意見が出され、自身の研究活動の目的を問い直すことができた。

2 点目は、研究仮説と因果についての議論である。あ

る受講者が気になる点としてあげた、「法則論的知識とは何か」という疑問から議論が始まり、そもそも研究分野によっては法則論的知識が存在しない分野もあるのではないかという意見もあがった。その中で、研究における法則論的知識とは、先行研究で積み上げられた知見のことを指すのではないかという、講義のまとめのような意見は、受講者全員を納得させることとなった。先行研究の知見（法則論的知識）を整理することで、自身が研究について立っている前提について反省的に理解することが可能であり、また、研究のオリジナリティとは、その先行研究による法則論的知識に対して、どう戦っていくのかということであると改めて認識することができた。そのような先行研究の整理、オリジナリティの明確化を経て研究仮説の話題につながっていった。また、研究仮説を基に無数に考えられる因果関係から分析対象となる因果を抽出するため、因果についても議論した。議論の中で興味深い意見としては、1回しかない社会事象等を対象とする研究が行われる場合が多い社会学において、仮定を含む前提において因果の同定を行う必要があるが、その仮定を含む前提がどれだけ妥当なものか、とする意見である。また、重回帰分析に用いる特定の変数を選択した時点で、研究者の研究仮説に基づいた主観的な判断が少なからず入ってしまう。特定の因果候補を選択しているため、例え優れた結果だとしても、自然科学的な一般性とは異なるのではないかという意見もあがった。1点目の議論と重なる部分でもあるが、数値を用いた統計分析であったとしても、研究者による仮説のもと変数が取捨選択されているため、どうしても一般性を保つことは難しい。しかし、先ほども述べたが、果たして完璧な一般性が存在するのか、また本当に必要であるのか等、考えれば考えるだけ答えは出にくくなる。因果関係の一般化は研究者が目指すべき1つの目的であるかもしれないが、その目的にとらわれ過ぎず、因果の前提条件にはすでに研究者のバイアスがかかっている、主観的要素を含んだ仮説が自分の研究の方向性にもあるということに認識しながら、研究活動を進めていくことが、より読み手に対して説得性を与えることにつながるのではないかと考える。

(文責：修士課程2年 高倉 維)